

第5回
多文化共生のための
国際理解教育・開発教育セミナー
報告書

2009年1月

兵庫県教育委員会
神戸市教育委員会
(財)PHD協会
(財)アジア福祉教育財団難民事業本部
(財)神戸YMCA
(独)国際協力機構兵庫国際センター

はじめに

今日、世界では、紛争、環境問題、貧困、難民など、地球的規模で様々な課題に直面しております。開発途上国が抱える諸課題は、我々に日本人にとっても、決して他人事ではなく、一地球市民としてしっかりと考えなければなりません。

現在、学校現場でも、総合的学習の時間の活用を中心に、国際理解・多文化共生の観点から、「私たちが身近に取り組めることは何か。」を考えるための取り組みがなされています。さらに、兵庫県に暮らす 10 万人を超す外国人県民の異なる文化、生活習慣及び価値観を相互に理解し、豊かに共生する多文化共生社会の実現を目指して様々な取り組みがなされています。

今年で5年目を迎えた「多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー」は、兵庫県下の学校現場での多文化共生教育や国際理解教育・開発教育の推進とより実践的な取り組みを紹介することを目的に開催しております。今年度は、2 日間で、のべ約 150 人の参加がありました。

身近なものをテーマに分科会を実施し、国際理解教育・開発教育が決して敷居の高いものではないことをお伝えできるよう心がけました。

本セミナーをきっかけに学校現場などで是非ご活用いただければと存じます。また、来年度以降も本セミナーの開催を考えておりますので、お仲間をお誘いあわせの上、ご参加ください。

ここに「第5回多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー」の講演内容及びワークショップの様子を報告書としてまとめましたので、今後の国際理解教育・開発教育のご参考になりましたら幸いです。

最後になりましたが、本セミナーにご協力賜りました講師の方々に厚く御礼申し上げます。

主催者一同

よりよい授業を実施するために

- ・ 各団体では、随時、セミナーなどを開催しております。それらにご参加いただければ、より具体的で詳しい情報が得られます。

学びを更に深化させるために

- ・ 各団体から講師として、貴校及び貴団体に伺うことも可能です。適宜、お問い合わせください。

困った時のために

- ・ 各団体で、授業の内容、組立て方、情報源等についてアドバイスいたします。各団体の資料室も閲覧可能です。お気軽にご相談ください。

兵庫県教育委員会(多文化共生センター)

〒659-0031 芦屋市新浜町 1-2

TEL:(0797)35-4537 FAX:(0797)35-4538

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~mc-center/index.html>

神戸市教育委員会(指導課国際教育担当)

〒651-2412 神戸市中央区加納町 6-5-1

TEL:(078)322-6546・6547 FAX:(078)322-6143

<http://www.city.kobe.jp/cityoffice/57/021/kokusai/kokusai-topb.html>

財団法人 PHD 協会

〒650-0022 神戸市中央区元町通 5-4-3 元町アーバンライフ 202

TEL:(078)351-4892 FAX:(078)351-4867

<http://www.kisweb.ne.jp/phd/>

財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部関西支部

〒650-0027 神戸市中央区中町通 2-1-18 日本生命神戸駅前ビル 11 階

TEL:(078)361-1700 FAX:(078)361-1323

<http://www.rhq.gr.jp/>

財団法人神戸 YMCA(国際・奉仕センター)

〒650-0001 神戸市中央区加納町 2-7-15

TEL:(078)241-7201 FAX:(078)241-7479

<http://www.kobeymca.or.jp/>

独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター(JICA 兵庫)

〒651-2412 神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2

TEL:(078)261-0341 FAX:(078)261-0342

<http://www.jica.go.jp/hyogo/>

1. テーマ名：『教室で学ぶ 子どもの権利』（セッション - a）

2. ファシリテーター 氏名：佐藤 友紀
所属：開発教育協会 理事

3. 参加者数： 40 名

4. プログラム内容（ 14：40 ～ 16：10 ）

時間	プログラム流れ・参加者意見など	場の雰囲気・反応
5分	《自己紹介》 ファシリテーター自己紹介 セッションの概要説明	最初は緊張感が漂っていた。しかし講師の話し方や声のトーンが優しく、安心感があった。
30分	《アイスブレイク（グループ分けとフォトランゲージ）》 写真のピースを手がかりに計8つ（各4～5人）のグループを作る。 ジグソーピクチャーワークを実施し、完成した写真に写っている子どもについて考えながら、世界のどこかに住むその子と出会う。グループ発表と写真解説。	緊張感がほぐれ、和気藹藹とした雰囲気の中、ジグソーピクチャーワークを開始。
15分	《子どもの権利条約》 日本ユニセフ協会の子どもの権利条約の抄訳版を配布し、読み合わせる。 各ジグソーピクチャーに登場する子どもの写真を見ながら、「守られている権利」と「守られていない権利」を考え、子どもの権利条約について知る。	なかなか難しい議題だったが、参加者は必死に取り組んでいた。世界の子供たちの置かれている状況を知る良い機会になったようだ。
20分	《最も大切な権利とは》 子どもの権利条約の中から、参加者が感じる「特に大切な条文を残すとしたら？」という視点で話し合う。	話し合い後、意見の共有はなく、次のトピックへ移行。
15分	《権利の宝箱》 「子どもにとって大切な権利」を確認する。 講師の鞆に手を入れ、中に入っているものを当て、その物から子供にとって大切な権利を考える。 （例：きれいな水を飲む権利・栄養のあるものを食べる権利など。） フェアトレードを通してパレスチナで作られた石鹸も道具として登場。	「手で触る」という行為が、児童・生徒の興味を増進させ、子供が理解しにくいテーマだが、より明確になると思われる。
5分	《振り返り・まとめ》 アンケートの記入	打ち解けた様子で、自主的に意見交換を行っていた。
ワークショップに参加して（感想）		
当分科会に参加し、改めて自分が口先だけで生きてきたかを実感した。「今の自分に何が出来るのか」を考え、新たなステップを模索している状況だが、「平和・平和」と叫び回るより自分が出来ることを継続していくことが大切な気がする。様々な国の写真を現代の自分の目で見ると、彼らが一番必要とするものは安らかな生活と国の安定した基盤だと考える。私は、彼らに「笑顔だけは忘れないでほしい。」と伝えたい。当分科会は平和を考える契機付けとなった。		

1. テーマ名：沖縄と難民(セッション - b)

2. ファシリテーター 氏名：中尾秀一
所属：難民事業本部

3. 参加者数： 29 名

4. プログラム内容 (14:40 ~ 16:10)

時間	プログラム流れ・参加者意見など	場の雰囲気・反応
5分	《アイスブレイク》 「あいうえお作文 オ・キ・ナ・ワ」を実施	自己紹介が上手く進み、参加者は、楽しそうに取り組んでいて、とても良いアイスブレーキングだった。
10分	《難民とは誰か?》 4つのパターンを例に、難民の定義を各自が考え、会場に掲示された用紙に記入する。	積極的な質問が二つ挙がり、環境・災害の影響の人々は難民ではなく被災者であることを知り、感心している様子。積極的に理解しようとしている。
20分	《シミュレーション「何を持って逃げるのか」》 難民となって逃げるときに何を持ち出すか、グループで5つ選ぶ。 5つの中から2つ選ぶ(制限時間：30秒)	時間は3分。各グループ、靴、財布、身分証明書などのアイデアがあがり、大変面白かった。グループ単位で答えにまとめ全体で情報共有。
10分	《解説「沖縄戦の概要」》 ・ 開戦から地上戦終結までの経緯 ・ 沖縄戦の経過、読谷山村からの避難先など	資料を見て黙って考えている。説明を聞き自分で考え、沖縄戦の概要について理解しようとしている。
30分	《ワーク「読谷山村から逃げる人々」》 各自6人の「体験記」から1つを読み、避難時の苦労についてワークシートに書き出し、グループ別に模造紙にまとめる。 グループ毎で避難時の苦労を模造紙にまとめる。 現代の難民の避難との共通点を見つける。	各自、役割分担をうまく行い、素早くワークに取り組み始める。 集中して資料に目を通している。 時間がないが要点をまとめて各自の意見を述べて相談していた。 個人的に積極的に質問する参加者もいる。
15分	《振り返り》 アンケートへ記入しながら、教材・本を紹介。	沖縄に関する本の紹介に関心を示している。
ワークショップに参加して(感想)		
アンケート用紙を書き続けている人が残っていたので、話し合いを開始するのが遅いグループが目立った。15:50頃からは全てのグループが意見交換を開始した様子。積極的に意見交換をされていて若干難しいテーマにも自ら進んで、知識を深めようとしていた。		

1. テーマ名：「豊かに共生する心」をはぐくむ(セッション - c)

2. ファシリテーター 氏名：伊井 直明

所属：子ども多文化共生センター 主任指導主事

3. 参加者数： 19 名

4. プログラム内容 (14:40 ~ 16:10)

時間	プログラム流れ・参加者意見など	場の雰囲気・反応
5分	《アイスブレイキングA》 誕生日チェーン：参加者全員を誕生日順に並び替える。 ・ 1月1日から12月31日の順に並ばせる。 ・ 声は出さない。 ・ 誕生日が同じ人がいる場合は紹介する。	アイコンタクトや手などの動作を使い、すばやく誕生日順に並んでいた。手際が非常に良く、テキパキとしていた。約1分で並び終えた。
10分	《アイスブレイキングB》 指示かき、恥かき：ファシリテーターの指示通りに絵を描く。 ・ 質問も相談もしてはいけない。 ・ 描き終わったら隣近所の人と見比べ、相違点を話し合う。 【指示内容】 秋の休日を楽しく過ごす家族の様子。	一人として同じ絵はなかった。自然(木、山)が絵に含まれている方が多い。家族の人数が違う。個人の体験やバックグラウンドの違いが絵に表れる。
60分	《さまざまな国のつながり(1)》 各グループ(個人)が円になるように机を配置し、席につく。架空の国のカードを配る。 グループごとにカードを読み、その架空の国がどのような国なのかを理解する。 架空の国に自由に名前をつけ、画用紙に国の名前、その国の特徴を簡単に書いて、参加者に見えるよう発表する。 全ての国の紹介が終わったら、自分の国と関係あると思われる国をリストアップし、それぞれどのように関係しているのかをまとめておく。 それぞれのグループ(個人)がリストにあがった国と話し合い、関係があると認められたら、国同士ひもでつなく。 の活動が終わったら、円の中がどのようになったか確認し、感じたこと、考えたことを話し合う。	和気藹々と話し合っていた。非常に現実的な国を描いている。2国間が互いに相手国に求めていることは違う。相手国家に求めることが、自国の利益優先であることなども確認し、「共生」「自己実現」などについて話し合う。
	《さまざまな国のつながり(2)》 ファシリテーターは、別紙の「国にまつわる話」を読み上げる。その話によって影響を受けると思われる国は立ち上がり、なぜ立ち上がったのか理由も発表する。	どの国の人も「幸福」や「豊かな生活」を求めている。どの国家にもそれを実現させる権利があることを確認し、その実現に向け、国家間でどう対応すればいいか議論する。
15分	《振り返り》 ア 自分自身に得たものを発表し合う。 イ 「自己実現」と「共生」の視点から現在進めている多文化共生の改善点を考え話し合う。 ウ このワークショップを児童生徒が行うときの問題点や修正箇所を話し合う。	ある一例：日本人はスーツで入学式に参加することが一般的であるが、外国ではそうではない。市民1人1人が外国の方々へ声をかける努力をし、日本の文化を教える。

ワークショップに参加して(感想)

小さな国も大きな国でも強い繋がりがあがるが、人的資源がある国は、国としての魅力がある。食料だけでなく労働者など人的な関係があることを知った。市民としてそういう人にどうするかなどを具体的に考えていきたい。(例：ごみ収集日などの情報の英訳)

1. テーマ名：『音楽を使った授業の効果的な手法』（セッション -a）

2. ファシリテーター 氏名：上之山 幸代
所属：セラピスト・学校心理士

3. プログラム内容（ 13:00 ~ 14:30 ）

時間	プログラム流れ	場の雰囲気・感想
10分	<p>《はじめに、この曲を！》 音楽を通して多文化共生を考えるヒントになるような進行。 「アメイジング・グレース」 アメイジング・グレースは奴隷船の中で生まれた曲であり、 「全ての人の上の愛の光が降り注ぐように」という思いが込められてることを説明。 (ポイント) 音楽鑑賞時に、その曲の背景や作曲者の思いを伝えることが大切。音楽鑑賞の興味のある子供は少ないが、多文化共生と難しいテーマを考える際には効果的。考える上で音楽は効果的。</p>	美しいBGMの中、和やかな雰囲気で始まった。 《アメイジング・グレース》 (どんな身分の人のも愛を)
10分	<p>《ハーブって?》 アルペジオ...奏法。意味は「和音」 アルパ...スペイン語でハーブの意を持つ。ハーブのルーツはメソポタミア文明に遡り、弓矢がその原型である。狩猟は男性の大事な仕事。命(人)と命(動物)を繋ぐということ。 弓矢は、命を奪う武器と、楽しさを共有する楽器との双方に進化した。起源が同じであるのに全く違うものに進化した過程に、人の感情が影響している。 アメイジング・グレースなどをひくと、優雅な感じのするハーブは、実は、狩猟時代の弓矢がルーツであることを伝える。 メソポタミア文明の頃、男性の命がけの仕事からハーブ型の楽器が生まれたことを想像しながら・・・</p> <p>「もののけ姫」 (ポイント) 楽器の起源を知り、音を感じることで、異文化(古代)の人間に思いをはせることが出来る。 弓矢を「楽器」に進化させた心と、「武器」に進化させた心を考えてみる。人間は「分かち合いたい心(樂器的)」と「独り占めしたい心・負けたくない心(武器的)」の両方を持っていることを感じ、「共生」のためには、武器的な心をどうすれば良いか? 問題提起。魂を研ぎ澄ませて、太古の記憶を呼び起こすように聴いて下さい。</p> <p>PS 映画「もののけ姫」の作品は、「人と自然の共生・部族間の争いをどう解決するか」がテーマとなっている。</p>	涙を流して聴き入る方の姿もあった。 楽器の活用という意外性もまた生徒を巻き込むいい方法かもしれない。
15分	<p>《ワークショップ その1 南米にはどんな国があるの?》 「南米大陸にある国の名前をいくつ知っているか?」 「コンドルは飛んでゆく」を演奏する間に、用紙に書く。アルパは、パラグアイのハーブであることを、原住民はモンゴロイドであること、現在のパラグアイ人の97%は、白色人種と黄色人種の混血であること、日系移住者のことなどを伝える。 ポイント 国名をどれくらい知っているか? まずは知ることから。 曲をBGMに使ってみる。</p>	7カ国名書いた人が最多。 異文化を考えるには、国名を知ることが最低限。BGMとしてそれに関する曲を流すのはいい。未知の曲でも、リズムを体感すると身近に感じる。

15分	<p>《ワークショップ その2 ポルカのリズムって?》 ポルカ...日本人には馴染みのないリズム、パラグアイ発祥。基本拍は3拍子で、2拍目と3拍目の間に1拍を入れていく。全員参加型で手拍子。</p> <p>パラグアイのポルカのリズムは、3拍子と2拍子が同時進行する。実際に手拍子をして体験し、慣れないリズムに挑戦して見る。</p> <p>ポイント 手拍子に人間性や特徴が表れる。 慣れないリズムは、真似しづらい人が多いことを知る。異文化になじむとは?を少し考えてみる。 異なった拍子(3と2)を、合わせる体験で、異文化を合わせるについて考えてみる事が出来る。 後2つくらいのリズムを重ねあわせる体験から、多文化共生について考えてみる。</p> <p>パラグアイについて。黄色人種である先住民は現人口のうち約1%。60~70年前に日本人のパラグアイ移住が盛んであった、日本語教育が盛ん。(ポルカ デスペディーダ演奏)</p>	難しくて途中で諦めてしまう人もいたが、全体的に一生涯懸命取り組んでいた。
15分	<p>《ここまでのまとめ》</p> <p>多文化共生を考える 興味を持つ。知る。感じる。認める。許す。</p> <p>違いを楽しむ余裕。 通じ合う部分を見つける嬉しさ。</p> <p>共に生かしあう。</p> <p>音楽は文化である。 異国の音楽を聴くだけでも、異文化を知ることになる。 「合奏」は、「多文化共生」のようなものともいえる!? (遠き空の下で 演奏)</p>	異文化とは、言葉が通じなくても音楽で共有できるものである。家族は多文化共生に繋がる。様々な価値観の人が共存している。知識の取得は頭で行うものであり、一人でも可能である。ハートで感じ、分かち合うことは人が集まってこそそのもの。相反するものも共存している。(例)オリオン座とサソリ座
15分	<p>《ワークショップ その3 こんな時...》 絵画コンクールに入賞した人が参加するパーティーです。3つの異なる文化を持つ人30人が絵の展示会場に集まりました。</p> <p>A文化 A語を話す。(17人) B文化 B語・C語を話す。(5人) C文化 C語・A語を話す。(8人)</p> <p>あなたがB文化の人なら、どんな気持ちになり、どんな行動をとるかを考える。</p>	言葉は文化を考える上で大事なもの。しかしそれよりも大事なものは心で感じるもの。色彩(虹の七色)・音楽の感じ方は感性によって異なるが、共有することは可能。虹の七色は、混ざると透明になる。
10分	<p>《終わりの挨拶》 カスカーダ(滝)演奏</p>	心地よく体に浸みこむようなメロディー、盛大な拍手の中終了。
ワークショップに参加して(感想)		
楽器(アルパ)と聞くと自分には演奏できないし、無関係なものに感じるが、あらゆるものを教材にできるのではないかと考えられるようになった。その国の文化というものには、きちんとした背景があるので、服装や料理などでも十分に教材になりうる気がする。		

1. テーマ名：『楽しく学ぶ防災・リサイクル』（セッション - b）

2. ファシリテーター 氏名：永田 宏和
所属：NPO 法人プラス・アーツ

3. 参加者数： 19 名

4. プログラム内容（ 13：00 ～ 14：30 ）

時間	プログラム流れ・参加者意見など	場の雰囲気・反応
15分	《参加者同士の自己紹介》 ・自己紹介、日頃の教育現場での課題、本セミナーへの期待（リサイクルについての関心が高かった）について共有する（意識の共有）。 ・授業と防災をいかに関連づけるか・兵庫県民の防災に対する意識	講師の到着が遅れたが、スタッフが各自の防災についての見聞等を話し、参加者も笑顔見られ協力的。
15分	新しいタイプの防災訓練：「イザ！カエルキャラバン」の紹介。（全国規模） プラス・アーツの活動紹介、防災というテーマをいかに楽しく演出するかで子どもたちが防災を学ぶ場（環境）づくりをしている各地域の既存の防災訓練＋「遊び」：若い層に人気・リピーターも多い	斬新なアイデアを楽しんでいた。 スライドに釘付け・頷きも多い。 メモを取る参加者多い。
15分	《体験プログラム 映像作品『ORANGE』》：時間がなく割愛。	希望者に配布
10分	《体験プログラム 持ち出し品なあに？クイズ》 非常時に持ち出すべき品を覚えるためのクイズ：子どもに人気の防災訓練プログラムの一つ。30秒間でスライドに映る12の防災グッズを覚えた後、覚えている限り解答。その後、なぜその防災グッズが必要なのか・使用方法を考える。	必死に防災グッズ覚えていた。 解答時：使用方法については、「なるほど」という声が多い。
15分	《体験プログラム 防災カードゲーム「なまずの学校」》 時間がなかったため、やり方を説明し、省略版で行った。（パワーポイント使用） 昨年の神戸市の防災教育支援プログラムのモデル校での試験的実施でも非常に評価の高かった防災カードゲームを体験。	積極的に取り組んでいる。「なるほど」という声が多い。もう少しじっくり見たような雰囲気だった。
10分	《防災教育プログラム開発のメカニズムを詳しく解説》 上記3プログラムが開発された背景やメカニズムを解説し、教育現場で生徒の興味をひくための手法を段階別に紹介。 低学年：紙芝居や劇などの受け身的なもの 中学年～高学年：自分たちが何かを作るプロセスに巻き込むことが効果的。「楽しい」という感覚が大切。	時間の関係で、スライドを流して見たため少しわかりづらそうだったが、核心は掴めているようで、頷いている。
10分	《振り返り・まとめ》 防災を子どもに意識させ、授業に取り込むには大人も楽しいと思えるかという点が大変。楽しみながら学ぶことが必要。	参加者の満足度が高く、大きな拍手で終了した。

ワークショップに参加して（感想）

テーマが斬新だったので、聞いていて楽しかった。自分自身が学校で経験した防災訓練は退屈だったが、講師が紹介したプログラムには参加したいと思った。阪神・淡路大震災を経験した一県民として、後世に伝えていくことは本当に大切だと思う。

箸を負傷時の副木に、毛布を担架に、とある物品を複数の用途に使うと緊急時にも対応できることを知れて、非常に参考になった。

また、生徒がかえっこパズル等に夢中になる様子に触れ、大人も子どもも楽しんで学び、防災に対するスキルを確実に身に付けることができるという視点を得る貴重な機会となった。

1. テーマ名：『貧しい村を支援する方法』（セッション - c）

2. ファシリテーター 氏名：藤野 達也
所属：財団法人PHD協会

3. 参加者数： 23 名

4. プログラム内容（ 13：00 ～ 14：30 ）

時間	プログラム流れ・参加者意見など	場の雰囲気・反応
20分	《自己紹介》経歴・仕事内容など ・27年間国際協力をしてきたアジアの農村の様子。 ・なぜ国際協力が必要か、誰が国際協力するのか （ネパール・スリランカ・ビルマの例） 国民が税金を支払うことで役立ち、中心は外務省でありその下にJICAなどがある。	国際協力に関わる団体の多様さに驚いた様子。
	《参加者の自己紹介》 国際協力したことのある人 ガーナで協力隊1人、青年海外協力隊2人。国際協力の必要性とは？ 貧困、経済格差、温暖化、戦争、教育を受けない児童に教育を。	当てられた人がスラスラと質問に答えていた。真剣に聞いているように見える。
45分	《ワーク スライドと質問、グループ討議》 ・6つのグループごとに東南アジアの村にいると想定し、その状況でスライドを見て、貧しさの原因と対策を考える。（ある東南アジアの国で首都から600km、最寄の都市から3時間、人口約800人。） ・グループ発表 労働力不足 機械化、食糧不足 農業技術整備、教育 人材育成 衛生 水道・深い井戸・ドクターの巡回・予防知識 道路整備 米を売りに行ける	スライドを見ながら、メモを取っていた。一人一人メモをたくさん取っている。 支援のあり方について改めて考えさせられた。
15分	《ワーク スライドと質問、討議》 ・支援が入ったアジアの町や村（ベトナム・タイの様子） チェンマイ スターバックス、地元のコーヒーを使用 タイ 新しい作物を育てる、カボチャ、イチゴ、ナスなど 村の中だけの問題もあるが、村の中だけで済まない問題もある。自給自足で回らなくなってきた。お金をどうやって稼いでいくのか。 この中で貧しさというものを考えていかないといけない。世界にある問題を考えていく時、貧しさを切り離さずに考えていくべきだ。	講師のスライド解説に集中している様子。
10分	《解説と質疑応答》 ・自給率4割未満の日本として、アジアと接点をどう考え、そこから何を感じ取り、私たちがどういう日本を作っていくかを考えることが大切。	積極的に質問する方が一人もいなかった。時間が大変足りなかった。

ワークショップに参加して（感想）

長年、国際協力に関わってきた講師の言葉に重みがあり、「すみません」の気持ちで村に入っていくなど国際協力や支援のあり方について考えさせられた。
写真は複数の国のものだったが、それらの国の問題点には共通項が多いことを知った。
議論する時間は多くあり楽しかったが、動きの少ないセッションだったのが、少し残念。
貧しい村を支援する方法というテーマに対し明瞭な結論がなかったので、今後自分がどうするべきか分からない。

1. テーマ名：『食卓の牛肉から見える世界』（セッション - a）

2. ファシリテーター 氏名：丸山 まり子

所属：奈良県安堵町立安堵小学校教諭・開発教育協会大阪運営委員

3. 参加者数： 17 名

4. プログラム内容（ 14：40 ～ 16：10 ）

時間	プログラム流れ・参加者意見など	場の雰囲気・反応
10分	《あなたの好きな牛肉料理は？》 好きな牛肉料理でグループ分けを行う。 自己紹介を兼ねて、学習の場をやわらかに立ち上げる。	最初は少し静まりかえっていたが、一人が発言し出すと和やかな空気になった。
50分	《ミートセンターへ行こう》 牛1頭が精肉になるプロセスや丸ごと一頭活かされる文化と出会う 各テーブルに置かれたカードを並べ替え、精肉ができる過程を考える。その後、牛がセンターに運ばれ、スーパーで売られるまでの過程を絵で紹介。 Activity1:650kgの牛から何kgの精肉ができるか？解答時に廃棄物の利用方法も。 Activity2：ロールプレイ...各テーブル内でそれぞれ役割を決め、精肉業者とその家族の気持ちを考える。（差別行為など）	絵が小さくて少し見えにくい が、過程の説明は教室中が真剣に聞いている。 Activity1 では解答を知ったときの驚きが大きかった。 Activity2 はかなり積極的な様子で、反響も大きい。1・2を通して、講師の説明がやや足りないと感じた。
27分	《ふりかえり・まとめ》 牛肉を食べる食生活を人権の視点で考え、環境の視点の提案をする 前セクションのロールプレイングの総まとめ。学校での人権教育の問題、仕事の大切さについても話し合う。	Activity2の反響が大きく、各テーブルでたくさんの意見が出ていた。
3分	《世界牛肉旅行》 世界のいくつかの特徴的な国で牛肉と食生活、文化について私たちの かかわりを考える。	Activity2で燃え尽きたという 感じで、関心はやや薄かった。 最後の2～3分で新しいセクションに入ったので、やや焦り気味だった。
ワークショップに参加して（感想）		
自分の身近なテーマなのに、食肉について考えたこともなかったので、とても新鮮だった。食肉というシンプルテーマでも展開方法は多様で、命の大切さ、牛とくらしの結びつき、BSE問題、働くことの大切さならびに環境問題など、近年の生徒にとって大事なことがたくさん含まれていた。 講師の行動力、差別を許さないという熱い思い、ネットワークの広さなどがあってこそ、この教材ができたように思う。		

1. テーマ名：『なんでも？！100円ショップ』（セッション - b）

2. ファシリテーター

氏名：友前 尚子

所属：京都府立中丹養護学校教諭・開発教育協会大阪運営委員

3. 参加者数： 40 名

4. プログラム内容（ 14：40 ～ 16：10 ）

時間	プログラム流れ・参加者意見など	場の雰囲気・反応
10分	《はじめに》 自己紹介等 名前 どこから来たのか？ 最近嬉しかったこと (3分間歩き回って、できるだけ多くの方とあいさつする。)	先生の声掛けに反応なし。皆、積極的に話しかけている。3分間で話せた人数は5人が最多。
10分	《アイスブレーキング》 部屋の四隅「私と100円ショップ」 ・ 私は100円ショップによく行く ・ 私は100円ショップでよく買い物をする ・ 私は100円ショップが好きだ グループ分け（9つのグループに分かれる）	「どちらかというといいえ」の人たちは「開いている時間に行くことができない」という回答で、それに大きくうなずき同感している。（100円ショップによく行く質問の時。）
15分	《ブレインストーミング》 ・ 買い物をする時の基準についてグループでブレインストーミングをする 思いついた基準を小さな紙に一つずつ書き出していく（5分間） 最高40個出したグループあり。	自分でメモを取りながら先生の話の話を聞いている。全体的に笑顔が見え和やかな雰囲気。
20分	《ランキング》 ・ ブレインストーミングした項目の中から、グループで9つの項目を選び、ダイヤモンドランキングで並べる ・ 各グループの発表 完成したグループは悩んでいるグループがあればアドバイスをしに行く。	グループの一人一人が意見を出して良い雰囲気。各テーブルで盛り上がっている。発表では「値段」よりも「必要性」「安全性」を一番に挙げるグループが多い。ただ大阪の女性に聞くと、大多数が「値段」を重視する。
10分	《ビデオ》「徹底解剖百円ショップ」 ・ 百円ショップの製品を作っている中国の人々の様子についてビデオを見る	メモを取りながら真剣に見ていた。
10分	《ロールプレイ・解説・まとめ》 ・ グローバル化の進む中で、大量生産・大量消費から起こることについて、ロールプレイをする	時間が迫っていたので一つしかロールプレイができず残念な様子。
15分	《まとめ・ふりかえり》 ・ 私たちの消費生活と貧困との関係、格差社会、労働、環境の問題について考える ・ 教材の展開例について	時間が足りず、皆、十分に話し合えなかった様子である。

ワークショップに参加して（感想）

100円ショップという切り口から世界を考えるという発想がとても新鮮だった。我々の快適な生活のためだけを考えるとこういう安価な賞品の販売がある気がした。相互依存の重要な世の中だからこそ、先進国の我々がもう少し開発途上国の末端の人たちのことを考える余裕があってもいいのではと感じた。

やはり体を動かすワークは頭が働くのでいいと思うが、振り返りの時間をもう少し確保して欲しかった。

1. テーマ名：『ポーポキ、平和ってなに色？ポーポキと一緒に平和を創造しよう』（セッションⅢ－c）

2. ファシリテーター 氏名：ロニー・アレキサンダー
所属：神戸大学大学院国際協力研究科

3. 参加者数： 33 名

4. プログラム内容（ 14：40 ～ 16：10 ）

時間	プログラム流れ・参加者意見など	場の雰囲気・反応
5分	《はじめに》 本日の目的・本日の流れの紹介 アイスブレイク (ice breaker) ①「声を出して10数える（全員で）」 →3秒毎に1人の子どもが予防可能な病気でなくなっている。 ②「あなたはどこに立っていますか」 YesとNoの間に1本のロープを張る。平和についての質問 →ロープを握る位置で答える。→インタビュー 問い 「日本は平和な国である。Yes or No?」「その理由は？」	最初は発表者の問いかけに対して参加者の反応・表情は硬かった。 発表者のはたらきかけで、参加者の気持ちが徐々にほぐれていった。 意見を言いやすい雰囲気ができた。
15分	《ポーポキやポーポキ・ピース・プロジェクトの紹介》 「ポーポキ、平和ってなに色？ポーポキのピースブック」から 平和とは？遠い国の人たちの平和を食べている？ 「ポーポキ in パレスチナ」 分離壁→写真を用いつつ、実際の経験が語られた。	参加者は集中して聞いていた。 発表者は会場をまわりながら、参加者に答えが1つではない質問をくり返した。→意見が分かれることに慣れさせる？
10分	《ワークショップ：グループ作業Ⅰ》 時間設定5分（デモ） 次のところにはどの『非平和』がありますか。 街で 商店街で 学校・職場で 銭湯で 家庭で ……	今回はデモンストレーションのため、時間が足りなかった。
15分	《グループ作業Ⅱ》 3分（デモ） 平和にはどれが最も重要ですか。 多様性 武器 社会正義 自然 想像性・創造性 …… グループ毎に代表者が発表した。 → 意見が分かれた。	2回目のグループ作業なので1回目に比べたら打ち解けていた。 今回もデモンストレーションのため、時間が足りなかった。
10分	《グループ作業Ⅲ》 （デモ） 次の中からグループで選んで作業してください。（絵を描く） ① ポーポキと一緒に楽しめるピース・ガーデン ② ポーポキと一緒に食べるピース・ランチ ③ ポーポキのピース・マップ ④ ポーポキの仲間を増やそう！ ※ 頭（理性）だけでなく、感情、五感などを使って描く。 ※ 「平和」を中心に描く。	グループ内に自然な役割分担のようなものができてきた。
15:50 16:00	《発表・まとめ・質疑応答》 グループ作業Ⅲの発表 机上に作品を置いた。一作品ずつ全員で囲み、代表者の説明を聴きながら鑑賞した。	互いに認め合うような雰囲気で、鑑賞することが出来た。
ワークショップに参加して（感想）		
感覚的に捉えるワークがたくさんあり、皆動きやすそうな様子であった。参加者の意見や行動を引き出す工夫が随所に見られたが、絵を描くワークでは理性が働いており、それが絵を描くのを邪魔しているように感じた。感覚的に描けば、さらに面白くなったと感じる。「絵を描くと頭で考えるのと違う考えが浮かんでくる」という言葉が印象的であった。また、参加者の意見は全て肯定される雰囲気があり、自由に考え、発言する雰囲気があった。		

第5回多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー アンケート集計結果

1日目

1. プログラムについてのご感想をお聞かせ下さい。{1～5のいずれかに を付けて下さい}

(1) パネルディスカッション:「グローバルな問題をなぜ考えるのか、いかに学ぶのか」

	大変良かった	5	4	3	2	1	良くなかった
評価		5	4	3	2	1	
人数		9	24	34	13	1	

- ・3人のパネリストの主張の差がもっとあっても良かったと思うが、行政官がいてもよかった。
- ・セミナーの導入部分としてはよかったが、時間が長すぎた。
- ・パネルディスカッションの時にもう少し質問しやすい雰囲気がほしい。
- ・学校のサークルや国際ボランティア活動を通して、疑問がたくさんあったが、今後の活動にも活かことのできる内容だった。
- ・パネラーの話の展開がレジュメもなく全くわかりにくかった。
- ・コーディネーターの引き出し方が上手で聞きやすかった。
- ・JICAやNGO団体が身近に感じられるようになった。
- ・初心者には、難しすぎる内容だった。専門用語を使われると話についていけない。
- ・具体例(実践例)を教員などに紹介して欲しい。
- ・学校教育現場の具体的な取り組み紹介が欲しかった。

(2) セッション [参加された分科会{a～c}に をつけて下さい。]

a. 教室で学ぶ 子どもの権利

	5	4	3	2	1
評価	5	4	3	2	1
人数	26	9	1	0	0

- ・児童・生徒の心をつかめる授業展開だった。
- ・グルーピングに写真を使うのがよかった。
- ・具体的な内容はどうやって授業に組み込んでいけばいいのかわからない。
- ・子どもの権利条約が特に印象的だった。
- ・参加型のワークに実際参加してみるという形式は参考になる。
- ・グループワーク形式で他の参加者と意見交換できることが良かった。
- ・子ども達の心の揺さぶりを日々考えています。今日は私も揺さぶられてよかったです。
- ・子供にとって大切なものを知る、考えることができてよかった。
- ・教室で子供達自身が考え学び合う学習を展開していきたいです。
- ・教室ですぐに使える資料や授業のやり方を体験できよかった。
- ・教材としては大変おもしろく感じましたが、どう伝えるのかという面で難しいと思いました。

b. 沖縄と難民

評価	5	4	3	2	1
人数	12	11	4	0	0

- ・難民の問題もグローバルな課題であることを知った。
- ・やや内容が難しく、授業でどのように活用しようか迷う。
- ・これまで「沖縄」と「難民」に関係があるなんて思っていなかった。こういう意外性がいい。
- ・今の子どもに過去の日本の戦争経験について理解を広げ、現在の問題を考えさせたい。
- ・沖縄から難民を考えることで更に興味がわいた。
- ・沖縄戦について子どもたちに伝え、それを切り口に開発教育にも取り組める。
- ・沖縄と難民問題を重ねて考えることでより身近な問題として考えられる。

c. 「豊かに共生する心」をはぐくむ

評価	5	4	3	2	1
人数	3	12	5	0	0

- ・グループワーク形式で他の参加者と意見交換できることが良かった。
- ・資料から学ぶのではなく、想像するのが苦手な子どもには、いい内容の講義だった。
- ・すぐに総合的な学習の時間に利用できそうでした。
- ・相手の立場を実体験することで、更に理解を深めることが出来た。
- ・資料などをいただければ、ありがたい。
- ・できるだけ多くの人と意見交換できる時間があればより面白かったと思う。
- ・「理解」と「共生」はまた違うものだと感じた。難しい。
- ・視覚に訴える教材があって、工夫されている感じを受けた。
- ・紹介してもらえた教材の詳しい説明が欲しかった。

(3) まとめの時間

評価	5	4	3	2	1
人数	15	25	19	2	1

- ・小・中・高の先生で分かれて話したかった。
- ・時間的に長すぎる。まとめのセッションは不要。
- ・時間に追われて不快だった。
- ・「教師として」ではなく「市民として」何が出来るのかを考えるいい機会になった。
- ・「自分は何をするのか」をしっかりと考え、それを口に出していきたい。
- ・他の先生の意見を聞くことが出来るのが一番よかったところ。
- ・2 学期から来る外国国籍の児童に対して、何からしてあげればいいのか分からない。
- ・昨年度に続き参加して、今年度も非常に良かった。人権教育の一環でとりくみたい。
- ・学校に帰って、開発教育を広めたいと思います。
- ・色々な人の話を聞いてくれるのは嬉しいが、時間的に長い。

2. 本日のセミナーで学んだことのうち、どの内容がもっとも授業やご自信の取り組みに活かせると思いますか？

- ・実践的でよくわかった。
- ・教材の入手先を知りたい。
- ・参加型形式の授業は非常に興味深いものがある。
- ・学年に応じた取り組み方法を検討して行きたい。
- ・国をイメージで発表する手法などは、すぐに取り入れられる。
- ・多文化共生教育とは、「異質なものを受け入れる社会作り」という理念を伝えていきたい。
- ・「生きる」ということの原点を自分なりに見つめなおすことが出来た。
- ・色々なセクターの活動を知り、その中でネットワークを構築していきたい。
- ・誕生日の鎖は小学生でもできる。
- ・兵庫県に住む外国人の情報が得られて有意義だった。
- ・相談できる団体がわかって嬉しい。
- ・総合の時間や社会の時間をつかって、上手く授業展開していきたい。

2日目

1. プログラムについてのご感想をお聞かせ下さい。{1～5のいずれかに を付けて下さい}

(1) セッション

a. を使った授業の効果的な手法

評価	5	4	3	2	1
人数	22	12	4	1	0

- ・言葉以外のコミュニケーションの大切さ
- ・パラグアイの様子がいまいち伝わってこなかった
- ・自分の得意分野を活かして色々な分野をみつめることが出来る
- ・タイトルが だったから最初は全く違うものを予想していたので、少し拍子抜けに感じた
- ・理屈ではなく、感性に訴えるものの素晴らしさに気づいた
- ・多文化にこだわりすぎてたような気がしました。パラグアイのことだけでもよかったです。
- ・共生の意味、体で感じて目で見て五感で感じて会場全員で共存できてよかったです。
- ・南米にはとても興味があるので楽しかった。ポルカのリズムを実際にやることによっていろんなリズムでいいんだということが感覚的にとらえられるのでとてもいい体験になった。
- ・講師先生の伝えたい「言葉以外のコミュニケーション手段」音楽・絵・身振りの雄弁さを思い知りました。
- ・音楽を交えた良いプログラムであった。
- ・何でも自分の得意なものを使って工夫しているんなことをみつめることができるんだなと思いました。今日は1番前の席でうけて本当によかったです。もうすこし南米のことを知りたいと思いました。写真でも自然でも文化でも実際に行ったことはないのでビデオなどを利用したい。
- ・音楽だけでなく物、写真、さまざまなことから、どのようにメッセージを伝えるか多文化共生って結局もっと身

近ところにあるのだと気づきました。

- ・美しい音色をきいて心が豊かになった気分でした。
- ・知るという視点からいろんな素材を使い自分が感化された。これを実践でどう活かすか自分なりの方法を考えなければいけないので他のアイデアも聞きたかった。ぜひ使いたい内容もあった。
- ・実体験談を通し、「多文化共生」という難しい考え方をしなくてもいい、いろんなことを通して共生することができることを学びました。
- ・先生の話し方(さりげなくありがとう)や口調・トーンを見習いたいです。
- ・楽器を使ってのアプローチで少しとまどった。
- ・実感として何かを頭で学んだ気分ではないが体で感じれてよかった。

b. 楽しく学ぶ防災・リサイクル

評価	5	4	3	2	1
人数	10	3	1	0	0

- ・大人が楽しまなければ子どもが楽しくないという姿勢に共感した
- ・防災を教材化するときの方法はいかなるものなのだろうか
- ・永田先生の「大人が楽しくないと子どもも楽しくない」という姿勢に強く共感しました。「毛布リレー」をぜひ2学期にしてみたいと思います。
- ・今まであまり得られなかった情報をたくさんもらえた。楽しく防災教育をするためのヒントをたくさんもらえました。
- ・学校での取り組みを進められているということで、教材化する時の工夫がどうすれば良いか参考になった。
- ・とてもわかりやすくお話されてるテンポもよかったのでどんどん時間が流れていきました。
- ・教育現場にはない視点からの内容で大変良かった。すべてのことは切り口が色々あると改めて感じた。
- ・内容的には面白かった。でもよりわかるためには体験型の中身のほうがよかったように思う。

c. 貧しい村を支援する方法

評価	5	4	3	2	1
人数	9	11	0	1	0

- ・物資を援助するだけではいけないと気付いた
- ・もう少し内容を絞って欲しい
- ・さまざまな意見・考えがあることがわかり具体的な支援が難しいなあというのが良く分かりました。実際のアジアの現場に行ってみないとわからないという言葉がとても印象的でした。
- ・私の見えなかったものが自分の今の生活とつながっているんだということが最後にわかった。
- ・現実を知ってショックや刺激を受けた。
- ・私の知らない東南アジアの生活について知ることができた。物資を援助すればいいだけという考えでは原因解決ができないことを改めて感じた。今考えなければならぬ国際協力ということについて、とても良い視点を与えていただいたと思う。
- ・ただ貧しいだけで自分達とは別の話だと思っていたところをむすびつけ、いまからの支援を考えていかねばならないことが勉強になりました。

- ・改めて国際協力の支援のポイントを考えさせられ視野が広がったと思います。
- ・単なる講義でなく考える機会が持てた。
- ・国際交流で大切なことや、これから考えていかなければならないことを学ぶことができた。

(2)セッション

a. 食卓の牛肉から見える世界

評価	5	4	3	2	1
人数	15	14	3	3	0

- ・身近な問題で取り入れやすい
- ・経済的な話だけでなく、部落差別や人の心理状況まで話が及び、興味深かった。
- ・グローバルな経済的な話かと思ってましたが部落差別の話も入り人の心理状況も考える小学校の授業を受けているようでした。スーパーで売っている食肉がそう作られているのかと改めて勉強になりました。
- ・牛肉という身近な食材から大きな視点をもらえた。
- ・子どもの目線できちんとみたくったと思います。自分の浪費について深く考えないといけないなと思いました。
- ・食肉から話がふくらみそれをめぐって起こってくる問題を考えさせられ取り組んでいく手法を学びました。

b. なんでも?!100円ショップ

評価	5	4	3	2	1
人数	10	16	4	5	0

- ・身近な問題なのでわかりやすかった
- ・消費について考えるいい機会になった
- ・100円ショップのうら側が少し見えたような。なんでも?!100円ショップなので100円のものを使って何かやるのかなと思ってました。100円ショップにするために生産国の大変さがわかった。
- ・実践できたのでとても良かったし、すぐに使えそうでした。
- ・今後100円ショップに行き行って買い物をするとき100円ショップのグッズを見ながらその裏側にいる人たちのことを考えてしまうかもしれません。
- ・時間が足りなかった。遠い世界の話でなく自分の生活に直接していることがよくわかりました。
- ・もう少し深く話し合いができればよかったと思った。
- ・私は100円ショップが大好きでした。(今後はこういうふうに過去形で言えるかどうか。。。)学校の教室があまりきれいでなく、かごやマグネットなど自分のために使うのでないのなら、できるだけ安いもので。。。と考えて役に立つと思っていました。でも今日の勉強をして作られるしくみや流通、作っている人たちの暮らしを知って、必要なだけ買うということをしていきたいと思いました。いい買い方をする事で世界の人といつながっているということを意識して欲しい。
- ・肝心の100円ショップのときの活動やお話がゆっくりきけなかったのが残念でした。
- ・授業に早速とり入れることができそうでした。
- ・身近な問題で取り入れやすいが伝えたい気づいてほしいねらいをまとめてからじゃないと難しい。

c. ポーポキ、平和ってなに色？

評価	5	4	3	2	1
人数	13	6	4	0	0

- ・「平和」という漠然としたものを考えるいいきっかけになった。
- ・普段考えないことを多々考えさせられた。
- ・色を使い平和を考える、新しい手法が面白かった
- ・体五感全体を使って出来たこと。新しい。
- ・3時間ほしいと思いました。
- ・「平和」という抽象的なものを色やにおい、感じなども含めて考えてみるというのが新しく様々な発達段階に合わせてやってみたいと思いました。もう少しゆっくりワークショップをやりたいと思いました。
- ・これまで知らなかった「ポーポキ」は誰でも描ける親しめるものでした。子どもだけでなく私達も共に考えるテーマで話し合えてよかったです。
- ・今まで考えなかったこと、新鮮な目で考えることができた。平和について知らないことが多いことに気づけてよかったです。
- ・もっともっとお話をうかがいたかった。人はなぜ仲良くできないのでしょうか？
- ・平和はとても奥が深く難しいですが子ども達にかみくだいて考えさせることの大切さをあらためて考えました。

(3)クロージングセッション

評価	5	4	3	2	1
人数	21	25	10	4	1

- ・参加出来なかった他のセッションのことを聞いて良かった
- ・発表形式なのでみんなの意見が聞いて良かった
- ・なくてもよかった
- ・皆さんと話し合うことで先生方の取り組みも知り勉強になりました。
- ・話し合うことで他の人が考えておられることがわかり、ただ自分の感想を書くだけよりよかったです。
- ・先生同士の現状、今後やりたい事など共有できるので良い機会だった。
- ・「日常につなげる」最近、自分が課題としていることです。ヒントができました。
- ・参加者が帰ることなくふりかえりまで参加していることが来年につながっていると思う。
- ・自分がでなかったセッションの中身をきくと来年はそれに参加してみたいという目標ができました。
- ・小・中・高と分けて話し合いたかった。

2. 本日のセミナーで学んだことで、授業などで活かされそうなものはどのようなことですか？

- ・フレインストーミング(導入部分)や参加型ワークショップの手法
(例:ピクチャーパズルやフォトランゲージなど)
- ・ユニセフについての学習
- ・教材作りの視点、テーマの設定の仕方(身近なものをテーマにすること)
- ・行動することの大切さ
- ・そのまま授業に取り入れるのは難しいが、自分なりにアレンジしていきたい。

3. 今後、各主催団体にどのようなことを期待しますか？ご意見、ご感想、ご提案などお書き下さい。

- ・異文化理解のためのエンカウンターについて取り上げるのはいかがでしょうか
- ・早めの案内。 (回答)来年度は、周知活動時期を早める予定です。
- ・どうしても神戸中心になりがちですが、県内各地での開催をしていただきたいです。 (回答)年1回の開催ですと多数の参加者の利便性を考えて会場を決めざるを得ない状況です。
- ・JICAの建物に入りにくい。夏休み以外も気軽に入りたい。 (回答)市民の皆さまが親しみを持ってもらえるよう、より一層工夫していきます。
- ・セミナー後の報告会・ディスカッション
- ・イベント情報などのメールマガジン (回答)希望者へ各団体のイベント情報などが届くよう検討中です。
- ・講師と参加者の対話が少なく、セッションの振り返りの場。交流会のあり方。
- ・学年別に分科会を考えるとありがたい。 (回答)来年度の運営時の参考にさせていただきます。
- ・実際学校の方に来ていただき、職員研修を行って欲しい。 (回答)JICA兵庫では、各学校の要望に応じ、職員研修で協力させていただいたこともございます。一度、お問い合わせください。
- ・JICAへの協力依頼は、手続きが大変で担当者には敬遠されています。 (回答)依頼団体の皆様の業務が軽量化されるよう、JICAも努力をしてみたいです。

4. 当セミナー全体についてお答えください。

・開催時期について

参加しやすい	参加しにくい
65	6

・日程構成について

2日間開催を希望	1日終日開催のみを希望	ちょうどよい
20	20	32

5. このセミナーをどのようにお知りになりましたか？

イ、教育委員会	ロ、ホームページ (団体名)	ハ、口コミ	ニ、チラシ(入手先)	ホ、その他
24	12	18	13	12

第5回 多文化共生のための 国際理解教育・開発教育セミナー

共に生きる地球社会の実現に向け、国際理解教育および開発教育の実践セミナーを開催します。
経験豊富な講師陣がワークショップの活用方法を紹介するとともに、指導案を組み立てるための
情報や資料を提供します。2学期からすぐに使える手法満載のセミナーです。ぜひ、ご参加ください。

2008年

8月11日(月)・12日(火) 13時～17時 会場: JICA兵庫

主催:兵庫県教育委員会 / 神戸市教育委員会 / 独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター(JICA兵庫)
財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部 / 財団法人神戸YMCA / 財団法人PHD協会



定員: 120人(先着順)

参加資格: 2日間セミナーに参加できる方

申込み方法: 7月25日(金)までに、申込書を

FAXで送付、またはメールで必要事項をお知らせください。

申込み先: JICA 兵庫 E-mail: jicahic-event@jica.go.jp

TEL: (078)261-0341 / FAX: (078)261-0342

参加費 無料

(神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2)

駐車場はありません。

公共交通機関が周辺の有料駐車場をご利用ください。

JICA 兵庫アクセス でウェブ検索すると地図が出ます。

第5回 多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー申込書

名前			
所属			
電話番号	E-mail		
分科会 (で囲んでください)	セッション	第1希望 a / b / c	第2希望 a / b / c
	セッション	a / b / c	a / b / c
	セッション	a / b / c	a / b / c
過去の本セミナー 参加の有無	あり / なし	国際理解教育・開発教育の実践 経験	あり / なし
8月11日(月)交流会 18:00～		出席 / 欠席	

申込書にご記入いただく個人情報は、セミナーに関連する事前・事後の諸手続きに限定して使用いたします。

定員の関係で分科会の希望に沿えない場合もありますので、あらかじめご了承ください。

8/11(月)

13:00-14:30 パネルディスカッション

「グローバルな問題をなぜ考えるのか、いかに学ぶのか」

人権・貧困・平和など、地球的な課題をなぜ教室で教える必要があるのか。また、児童・生徒が主体的に参加しながら学ぶには、どのような工夫をすればよいのか。教育の現場と国際協力の現場で活躍してきたパネリストが語り合います。

パネリスト 藤野 達也 (PHD協会総主事代行・開発教育協会理事)
丸山 一則 (美方郡香美町立柴山小学校教頭)
向井 一郎 (JICA 兵庫 業務課課長)



14:40-16:10 分科会セッション

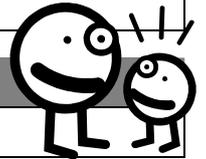
a 教室で学ぶ 子どもの権利	b 沖縄と難民	c 「豊かに共生する心」をはぐくむ
佐藤 友紀 (開発教育協会 理事) わたしたちは自分が大切にされていると感じることで、権利の大切さに気づきます。「わたし」の大切な権利は？同じ地球にすむ「あなた」の大切な権利は？写真や「権利の宝箱」を使い、教室で子どもの権利について学ぶ活動を体験します。	中尾 秀一 (難民事業本部関西支部支部長代行) 1945年、戦火を逃れて避難する沖縄の人々はどのような苦難を経験したのか。60年以上経た現代のアジア、アフリカの紛争地帯で、難民はどのように避難しているのか。沖縄の歴史から、現代の難民問題を考えます。	伊井 直明 (子ども多文化共生センター主任指導主事) 県内の子ども多文化共生教育にかかる現状と課題を理解するとともに、どうすればすべての児童・生徒に「豊かに共生する心」をはぐくむことができるのか、ワークショップをとおりて、ともに考えます。

16:20-17:00 まとめの時間

初日の学びや教育現場での実践を分かち合います。

17:00-18:00 参加者交流会 (希望者のみ)

主催団体の活動や教材など実践に役立つ情報を紹介します。(軽食を準備します。ただし、飲食代は自己負担です。)



8/12(火)

13:00-14:30 分科会セッション

a 使った授業の効果的な手法	b 楽しく学ぶ防災・リサイクル	c 貧しい村を支援する方法
上之山 幸代 (セラピスト・学校心理士) 「何を伝える？」 授業で話すときの基本的なテクニックから進行方法まで、アプローチする実践的で使えるワザがいっぱいの講座です。	永田 宏和 (NPO 法人プラス・アーツ理事長) 使わなくなったおもちゃやアクセサリ、絵本などを交換するシステム「かえっこバザール」と防災訓練を組み合わせ、国際協力や世界の問題を「楽しみながら知恵や技を伝える」体験型のワークショップキャラバンの手法を学びます。	藤野 達也 (PHD協会総主事代行・開発教育協会理事) 世界各地には様々な問題が存在しています。なかでも貧困は大きな課題です。その支援のために、日本から対象地域に調査に入った気分で、どうしたらいいかを考えるシミュレーションです。

14:40-16:10 分科会セッション

a 食卓の牛肉から見える世界	b なんでも?!100円ショップ	c ポーボキ、平和ってなに色？ ポーボキと一緒に平和を創造しましょう
丸山 まり子 (奈良県安堵町立安堵小学校教諭・ 開発教育協会大阪運営委員) あなたが食べている牛肉はどのように生産され、あなたのもとに届くのでしょうか？食肉の仕事は、その国や地域の文化・くらしと深く関わっています。私たちの食生活を環境・人権の視点で見直してみましょう。	友前 尚子 (京都府立中丹養護学校教諭・ 開発教育協会大阪運営委員) 私たちの生活には大量のモノがあふれ、大量のモノを消費しています。ここでは、身近な100円ショップを通して、自分の消費生活と世界とのつながりについて、グループディスカッションやランキングなどをしながら考えます。	ロニー・アレキサンダー (神戸大学大学院国際協力研究科教授) 平和について問いかける猫ポーボキの絵本を出発点に、一人一人が自分の五感で「平和」を捉え、「平和」の多面性と豊かさ、大切さを実感しながら、自分と社会の平和に繋ぐワーク。(今夏、訪問国イスラエルでのポーボキ活動の報告も行います。)

16:20-17:00 クロージングセッション

2日間のセミナーを振り返り、明日からの実践にどう活かすのか考えます。